

サラボルサ図書館などの経験を通して、図書館のコミュニティ・ハブとしての可能性を聞く



写真1 インタビューの様子

訪問日 2019年11月4日

記録者 古賀誉章

## 1. アントネッラ・アンニョリ氏の経歴について

アントネッラ・アンニョリ (Agnoli Antonella) 氏は、1952年セルヴァ・ディ・カドーレ生まれ。現在はボローニャ在住。1977年ヴェネツィアのスピネアにこどものための図書館を開館させ、2000年まで館長を務める。2001年から2008年まで、学術部長としてペーザロの新図書館「サン・ジョヴァンニ」の計画・実現に携わる。2011年からボローニャ市図書館協議会理事。近年、パブリック・スペースの環境づくりから公共サービス、司書教育に関するアドバイザーとして、ボローニャ「サラ・ボルサ」、グッピオ「スペレリアーナ」、フィレンツェ「オブラーテ」、ピサ、チニゼッロ・バルサモなど、数多くの図書館と協働しており、ロンドンの「アイデア・ストア」ではこども部門も担当した。2017年よりレッツェ市長補佐官（文化政策担当）として、図書館を基点とした町づくりに尽力。著書に『子どものための図書館』（ビブリオグラフィカ、1999年）、『知の広場』（ラテルツァ、



写真2 アントネッラ・アンニョリ氏近影

### 参考文献

- 1) アントネッラ・アンニョリ著、萱野有美 訳：「知の広場 図書館と自由」、みすず書房、2011年5月
- 2) アントネッラ・アンニョリ著、萱野有美 訳：「拝啓 市長さま、こんな図書館をつくりましょう」、みすず書房、2016年4月

2009年／邦訳：みすず書房，2011年），『拝啓，市長さま』（ビブリオグラフィカ，2012年／邦訳：みすず書房，2016年）などがある。（著書プロフィール等から抜粋）

## 2. サラボルサ図書館について

Q：サラボルサ図書館はどのような図書館か？

『知の広場 図書館と自由』にも書いたように，1990年代から2000年くらいにかけて，図書館について新しい動きが起きてきた。それは，本以上にそこに来る人を大事にする，という考えである。図書館をこれまでのような本を入れておく場所ではなく，人が居て心地よい場所であるように作ろうとした。そして，それらの多くの事例が，ただ図書館としてというより，一種のコミュニティ・ハブのようになり，その地域の地域開発の一部として活かされている。

Q：サラボルサのような図書館は古い大学・本・学問という特色のあるボローニャだから可能だったのか？

サラボルサ図書館が唯一の素晴らしい事例なのではなく，イタリアの大きなまちには大概古い図書館がある。そして，そこに新しく図書館を作るときには，古くて使われていない建物がこの国にはたくさんあるので，それを活用しようという話になる。サラボルサはそういう事例のひとつだと言える。他にその頃に関わった事例としては，ペーザロ Pesaro（マルケ Marche 州北部の都市），フィレンツェ Firenze，チニゼッロ・バルサモ Cinisello Balsamo（ミラノ Milano の北の郊外）などもある。ボローニャの場合は，ボローニャ大学のウンベルト・エーコ（小説家）らがコンピュータ・情報工学の研究所を計画していたので，それならば市民のための図書館をつくらうと提案したことから，このようなプロジェクトになった。

## 3. 市民のための図書館であるには

Q：ワークショップなどを通して，時間をかけて話して

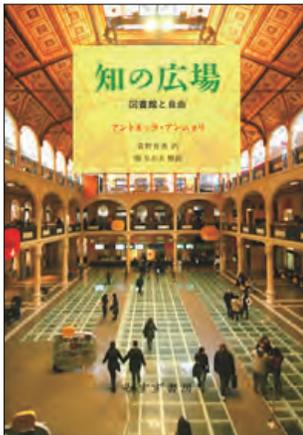


写真3 「知の広場 図書館と自由」表紙

（みすず書房 HP より）

※ 2017年12月発刊の「新装版」は表紙が異なる



みすず書房

写真4 「拝啓 市長さま、

こんな図書館をつくりましょう」表紙

（みすず書房 HP より）

いくのが大事と思うが、市民のニーズをまとめていく工夫として重要なことは？

最近まで南イタリアのレッチェ Lecce (かかとの位置にあるコムーネ、古代ギリシャ以来の古い歴史のある都市)の文化部長を務めていたが、そのときの経験を話そう。イタリア南部は図書館においては非常に遅れていて、レッチェは人口10万人ほどの町にも関わらず図書館がひとつもなかった。図書館はいまだに、研究者のための場所と思われていて、一般人にとっては敷居が高く魅力がない場所である。加えて、イタリアの最近の人たちは本当に本を読まなくなってきた。

### 1) 参加者とワークショップの導入について

レッチェのプロジェクトで、ある地域でしかできなかったが、ワークショップをするために、その地域の各種市民団体の人ではなく、まず個々の自由な個人の参加を募った。市民団体からの参加者は、ある意味ではその集団の利益代表になってしまうので避けた。このとき、どんなワークショップをしたかという、市民参加型の取り組みでは、最初はある程度誘導しないとアイデアが出なくて困るので、第一段階では、まず世界中のいろいろな図書館で行われつつある活動・取り組みの事例やビジョンをレクチャーした。もうひとつは、サードプレイス(家でも職場でもない、自由に行けて時間を他の人と共有できる場所)という概念があるが、本当に人の居やすい場所はいわゆる公共施設の中ではなかなか生まれにくく、どこかで自然発生的に生まれてくる場合が多い。そこで、どういった場所だと居心地が良くて自由な活動がしやすいのか、ということを実例を挙げながら話した。

そこから、だんだんと地域のニーズに合わせて問題を一緒に考えていった。南イタリアでの一番大きな問題とは、文化を大事にしない貧困さだ。お金のあるなしとは関係なく、こどもを育てる上で教養は要らないという考えの人がかなりいる。関連して、「機能的文盲」の問題がある。これは、学齢期には普通に読み書きは勉強してきたが、大人になって本を読まないために、文章が理解できなくなる状態を指す。また、新しいテクノロジーから切り離されているために、情報から隔絶されている人もいる。



写真5 サラボルサ図書館の吹き抜け

1階の床はガラス張りで、地下にあるローマ時代のアゴラの遺跡が見える。

## 2) 散歩：身体化のプロセス

次に参加型プロセスの第二段階として、一緒に散歩を実施した。図書館の予定敷地に向かって市民と一緒に歩く。実際に現地に行くことでリアリティをもって、何をしたい・できるのイメージを持つようになる。

歩いたあとに、ここで何がしたい・どうやって過ごしたい、というワークショップを大人と子ども相手に実施した。子どもは自発的に意見をドンドン言ってくれて充実したワークショップになった。一方で、大人には、話し合いのコンセプトとして、一緒に何かをするとはどういうことなのか、そこから何が生まれてくるのか、どうやって知らない人を惹きつけられるかを考えてもらった。専門家に頼むのではなく、市民と一緒に考えた。

## 4. 最新の図書館像について

Q：開館して20年近く経つが、今のサラボルサ図書館をどう思うか？

もっとどんどん革新していくべき。サラボルサ図書館ができたときにはイタリア初のメディアテックだったが、それからだいぶ時間が経っている。ICT技術の革新は速く、2001年にできたときですら、すでに中身が古くなっていた。こういうタイプの図書館は、社会のニーズに合わせて変わっていくべきだが、今では非常に遅れていると感じる。ただ、市街地の中心であり市民の集まりの中心となるマッジョーレ広場に面しているという立地に助けられて、たくさん利用されているが。

この間の変化として影響が大きかったのは、3階にあったアーバンセンター（都市の将来プロジェクトを研究・発表する場）が、より重要なものになって、規模的に発展してサラボルサの外に出てしまったことだ。本当は、図書館自体がそういう機能をもつべきなのだが、一番大事な機能が抜けてしまった。

実は、来る人を大事にする図書館づくりというフェイズはそろそろ一旦終わって、新しく次の段階に入るべきだと思っている。そこで、2つの新しい図書館を紹介したい。

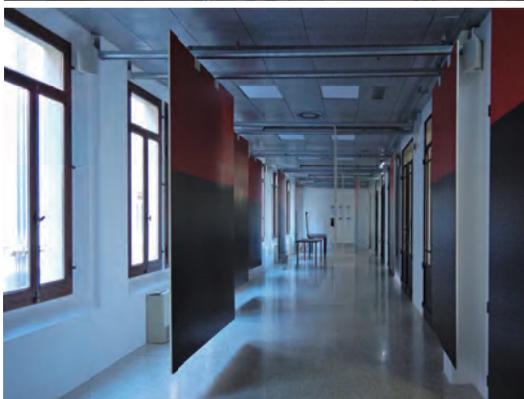
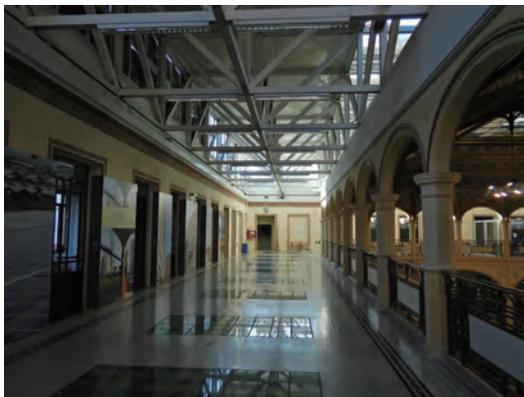


写真6 最上階にある、撤退したアーバンデザインセンターのあと

撤退したアーバンセンターのあった廊下と部屋。アーバンデザインセンターは隣の建物の改修とともに移転した。(写真は筆者)

## Q：ひとつめは？

ひとつめは、デンマークのオーフスにあって2015年に完成した「ドック (dokk)」という図書館と市民センターが一緒になったような施設である。ドックができたことがきっかけでオーフスは2017年のヨーロッパ文化首都に選ばれている。

ここは、10年以上かけて市民参加型で作ってきた場所で、かつ大学の協力もとても大きかった。例えば、インテリジェンスな本棚システムを従来の図書館で試してからドックに採用したり、巨大な地下駐車場に電気自動車をたくさん揃えて市民が自由に借りられるようにした。またこの施設は港湾地域の再開発の核として位置付けられ、多額の補助金が投入された。

また、図書館としての特徴は、カウンタが受付以外ほとんどないところで、図書館員はずっと歩き回って利用者を助けていて、奥でじっと座っている職員はほとんどいない。この事例は単に図書館と言うよりはコミュニティ・ハブ、いわゆる市民センターである。ここでは、市民が必要なあらゆる情報を得ることができる。例えば、市役所や公民館などでできるパスポートや免許の作成や更新などもできるようになっている。また、お年寄りでコンピュータが使える人には助けるスタッフをつけるなど、利用者を助けるしくみができている。

建物もすばらしく、一番の特徴は各場所が非常にフレキシブルで、時間ごとにいろいろなことに使われる可能性がある。設計者は、コペンハーゲンのブラックダイヤモンド（王立図書館、1999年）を手がけたグループ（シュミット・ハマー＆ラッセン）である。選定方法はコンペだったが、なぜ彼らが勝てたかという、自分たちの作ってきた案を市民と一緒にいくらかでも直していくという、融通が効く姿勢が評価された（普通は当選案のまま設計する）。先ほど述べたように、見えないところの準備に時間をかけて作られた事例である。

## Q：市民センターが図書館と一緒にある必然性・意味・メリットは？

本を読むだけならタブレットで済んでしまう。本を貸すだけなら、もう図書館はいらない。そんな中で、なぜ



写真7-1 オーフス公共図書館 Dokk1

公式 HP : <https://dokk1.dk/english>

写真はすべて、Dokk1の公式プレスフォトより  
(<https://dokk1.dk/press-requests>)



写真7-2 オーフス公共図書館 Dokk1

公式HP：<https://dokk1.dk/english>

写真はすべて、Dokk1の公式プレスフォトより

(<https://dokk1.dk/press-requests>)

今でも図書館をつくるのかということ、他の人と実際に  
出会う場所、出会うだけでなく他の人となにかを一緒にす  
る（活動を共有する）場所だからである。例えば、イギ  
リスのナショナルギャラリーは収蔵品を全てデジタル化  
しているのに、人々がわざわざそこに行くのは、「そこ」  
に何か意味があるからだろう。建物をつくること以前に、  
市民が一緒になって活動する場所をつくることに意味が  
あるのか、そこから考えていくことが大事だと思う。

また、お金が一切かからずにいられる場所、あらゆる  
市民を同等に受け入れられる場所だからでもある。例え  
ば、職安に行くというと、仕事がないかっこ悪い人、社  
会から脱落した人というイメージがあり、恥ずかしくて  
躊躇してしまう。そこで、もし職安が図書館にあれば、  
差別感を受けずに行くことができる。図書館はニュート  
ラルな場所で、民主的であらゆる人を受け入れられる場  
所と言える。

**Q：図書館を作るのに、（10年近くの）かなり長い時間  
のかかるわけは？**

Dokk1の場合は、場所決めから始めたので時間がか  
かった。元々大学と連携もあって、大学に近い場所が候  
補地として考えられていたが、ある地域の開発に関連づ  
けて整備しようということになって、敷地が港湾地区に  
変わった経緯がある。次に、資金調達課題であり、国  
や州への申請などの必要がある。

新しい建物の設計にも時間がかかった。例えば、この  
図書館の運営システムはよくできていて、本に分類ラベ  
ルがついておらず、スマホをかざすとチップが反応して、  
関連情報を提供してくれる（ビデオ、関連書籍、それら  
のある場所など・・・）。この開発に相当時間がかかった。  
また、書籍の分類では「こども」として場所を与えるの  
ではなく、「ファミリー」と括った点が新しい。利用者を  
ファミリーと捉えると、こどもと一緒に訪れる親のこ  
とも考え始め、ゾーンのターゲットも内容も変わり、家族  
も含めた活動や内容を考えることとなる。

そして、それらの相当細かいところまでを市民と一緒に  
考えたので、時間がかかった。例えば、ハンディキャ  
ップのある人に対しては、実際に当事者に試してもらい、  
意見を聞いたりした。もちろん、技術的なところは、大

学などの専門家が関わっている。

## Q：二つ目の新しい事例は？

ヘルシンキに最近できた「Oodi」（ヘルシンキ中央図書館）という、本気で市民参加型で作られた施設である。1階は、北欧という寒い場所なので、普通屋外の広場でやる様々なことを屋内でできるように大空間を設けている（コンサート、映画など）。ミーティング室もある。

2階は、大きなファブラボとなっている。ミシン・木工機械・3Dプリンタなどがあるが、アイロン台がたくさんある。アイロン掛けは家でもできるが、他の人と一緒にできるのが楽しいということだろう。この種の公共施設の役割として一番大事なことで、かつ危惧されていることは、都市では市民が孤独・孤立化することである。孤立化は、心身の健康状態の悪化などに伴う社会保障料の増加など結局は大きな社会コストにつながってしまう。そうなる前に、そうした人々をどのように救うかが検討され、他の人と出会って何か一緒にする場所を設けよう、という趣旨で、こうしたものづくりや家事のための場が設けられた。

そして、3階は10万冊の開架図書館になっている。

こういったプロジェクトだと、かなりの資本が投入され、テクノロジーの実験もできるが、今の時代の特徴は、その時代の「唯一のモデル」があるとは言えなくなっていることである。地域のニーズはそれぞれであり、その地域のニーズを汲みとって、それに合わせた施設をつくる。地域ごとに、ふさわしいモデルが求められる時代になっている。

## 5. 質 疑

**Q 育尾：** 運営に関わるいつもの人達は大事だが、それ以外の人々が来づらくなるという問題もある。特に小さな事例だとどうしたらよいか？

**A.A.(アンニョリ)：** それは、イタリアでも大きな問題である。年配の人のほうが、運営側に立たない人々も社



写真8-1 ヘルシンキ市立中央図書館 Oodi

公式 HP : <https://www.oodihelsinki.fi/en/>

写真はすべて設計者の ALA ARCHITECTS の HP より  
(<http://ala.fi/work/helsinki-central-library/>)

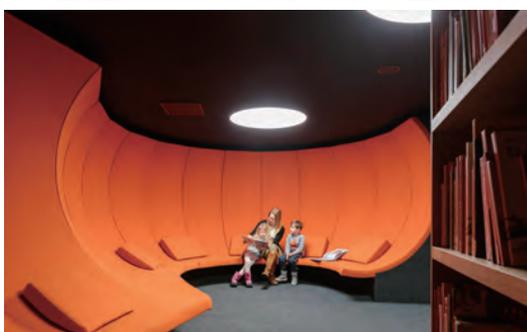


写真8-2 ヘルシンキ市立中央図書館 Oodi  
公式 HP : <https://www.oodihelsinki.fi/en/>  
写真はすべて設計者の ALA ARCHITECTS の HP より  
(<http://ala.fi/work/helsinki-central-library/>)

会的に受け入れる素地があると感じる（プログラム化された図書館づくりがなかった頃から、システムを作ってきた人たちだからだろうか）。逆に、そのできあがったシステムの中で育って資格を得てきた40代のほうが、そこから外れることを怖がり、**変化や多様な人々の受け入れにあたっての障害**になることがある。

しかし、**図書館という場所**はもう図書館員だけでやっていける場所ではなくなってきているので、マルチファンクションに様々な能力をもった人々が関わっていくべきである。大きな**施設（場所）**なら、準備段階から多様な人材を揃えていけるが、小さい**施設**では**そうした体制づくりは難しい**。例えば、小さな図書館同士でネットワークを作って、**そのスタッフの能力を共有する場**をつくるなどしないとやっていけないはず。

**実際問題として、こうした職員の体制づくりは大きな障害**になっている。日本の図書館をいくつかみだが、**そこでは職員の上下関係がはっきりしていて堅いと感じた**。札幌中央図書館では相当がっかりした。上下関係・女性職員と男性職員の関係、図書館員の中の**人間関係**など、創造的なデザインのためのシステムになっていなかった。これからは**職員の役割を分けてしまうのではなく、グーグル社のように隔たりをなくして、一緒に活動をするという体制が良いと考えている**。一緒に何かするときのほうが、**アイデアが浮かんだりする**。そういう働き方を図書館でも作り直す必要がある。

小篠： キーワードとして「参加型デザイン」が出たが、どの範囲の参加型デザインなのか、我々は正しく理解できていないかもしれない。建築設計をするためだけでなく、計画の段階から設計までシームレスに繋げる形で**検討を進めることは、日本ではまだポピュラーではない**。さらに、運営も含めて、様々なことについて市民が参画して、市民のアイデアを使いながらまとめあげていく**取り組み**はなかなかできていない。今日はそこが聞いていると思っている（=プロジェクトオーナー）。

A.A.： 「参加型」というと、今はみなこの言葉を使う。中にはいいことをしたという評判のための、**まがい物と言えりような事例も相当数**ある。大事なのは、計画の前だけでなく、実際に運営のときにアクティブに市民が参

加・提案・ケアすることである。

市民と一緒にケアしていくようにもっていくのが大事で、その点では小さな施設のほうが可能性があるかもしれない。自分たちの場所だ、という意識を持ってもらうためには、受身だけでなく、市民が関わって、自分たちの手で良い場所にしていくんだ！という意識があるほうがよい。それには、ボランティアなどどのような関わり方でもよい。レッチェで私が提案しようとしていたのは、子供のための菜園、家の植木が弱ったら長けた人に相談できる・助けてくれる（植物 SOS）などである。市民が絶えず参加している形、参加することでアクティブに場所を育てる形にまでもっていくべきである。

**Q 西野：** ヨーロッパのあらゆる公共施設で、「コラボレーション」や「コプロデュース」の重要性が指摘されている。行政にとってはコストダウンという意味もあると思うが、実際にコストダウンには繋がるのか？

**A.A.：** その観点は、次に「知の広場」を書き直すときには入れたいと思っていることである。イタリアでも、公共サービスを民間委託してコストダウンしようという風潮はある。その場合は受託者が勝手にユーザーを選べる権利が出てくるが、ただ本当のパブリックな場所ならば対象は住民全員とするべきであり、対象者の限定しながら委託は避けるべきで、それは無責任なコストダウンである。

ただ、ボランティアは必要である。そこに職員として働いている人だけで、多様な活動の全てはできない。その点、ボランティアは素晴らしい職能をもたらす。同時に、ボランティアがいることで行政にある水準のクオリティを保つべきだというプレッシャーとなる。

いずれにせよ、図書館を含め、公共施設は本来は行政が責任を持ってお金をかけるべき場所である。もちろん、ものすごく過疎の街なら、ボランティアで運営せざるをえないが。

**Q 西野：** ロンドンの「アイデアストア」をみて感動したが、そこでは移民への社会的教育が重視されていた。ボローニャサラボルサでは、移民の社会的インクルージョン・インテグレーションについての意識は必要なかった

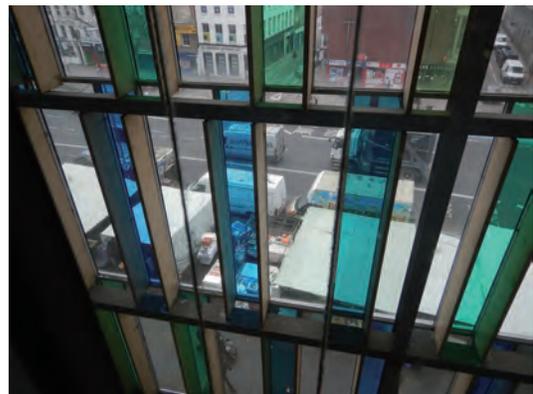


写真 9-1 アイデア・ストア ホワイトチャペル

公式 HP : <http://www.ideastore.co.uk>

(写真はすべて筆者)

のか？

**A.A.:** 「アイデアストア」は移民（バングラデシュ人中心）の割合が**とても大きい**地域にある。ヨーロッパの中でも平均収入が最低レベルで、図書館に行くことはほとんどない、という人達を**対象として**、本気で呼びこむつもりでの取り組みである。特に、立地が**とても大切**で、最初のホワイトチャペルは駅までの間にマーケットがある。学校やマーケットの近くで、**日常的な用事の動線に沿って**簡単にいけるようにしておくことが重要で、そうすればイスラム系の女性（一番弱い存在。自由な社会活動が家庭内の権力勾配によって強く制限されており、インテグレーションから排除される）でも、買物や子どもの送迎などのついでに行き、英語の講座を受けたりできる。家庭の中でも辛い立場にある彼女たちが、**夫に隠れて図書館を利用するためには**、無理しないで立寄ることができる、特別でない場所が重要である。



一方、ボローニャとロンドンでは環境が**だいぶ異なっており**、サラボルサ図書館を作った当時は、あまり移民への**対応というプレッシャー**はなかった。では、サラボルサ図書館で働く**職員は**そこまで複雑な問題に対応できるだろうか？ 1つのエピソードを披露する。



サラボルサ図書館は誰でも入れる場所であり、開架図書室に**コルビュジェのイス**を置いていた。そこを、ホームレスの人がよく占拠していたが、**ニオイもあり、他の利用者から苦情**が出始めた。そのとき、図書館員には**メディエーターのスキル**がなかったので、プロを呼んで助けを請うた。どうしたかという、**利用制限は**もちろん**公共施設としてNG**で、ホームレスの人と一般の人双方に呼びかけてクリアした。その際に示した面白い写真がある。2つの隣り合うイスの一つには**寝ているホームレスの人**（図書館なので、せめて本は持っていてくれというルールでマンガを抱えている）、もう一つには寝ている若い女子学生が居る。どちらに**この場所を使う権利**があるだろうか？ どちらとは言えないはずで、それを市民に問うためによく使っている。



写真 9-2 アイデア・ストア ホワイトチャペル

公式 HP : <http://www.ideastore.co.uk>

(写真はすべて筆者)

ただ、図書館員は**そういった、多様な人々の滞在の場となる**ということに**ネガティブに反応**してしまい、今は**そういう居やすいイス**を撤去してしまったらしい。残念なことである。ロンドンの図書館員には、そういうこと

はやってはいけないという感覚が染みついていると思う。

**Q 土田：** 都市全体の大きな計画があって、その中の部分である地域に対して、図書館という施設を利用して地域への波及効果を狙うという位置づけの理解でよいか？

**A.A.：** 都市全体の計画をしていた時代はあったが、その際に図書館は入っていなかった。そのうち、都市計画もキチンと行われなくなり、テリトリーを守る・歴史を活かすという程度である。

一方、都市再開発の結果、高級化してしまい、低所得者が住めない都市になってきている（ジェンティリフィケーション）という問題がある。ボローニャは有名な大学都市なのに学生人口が激減し、遠くから電車で通ってくる。

都市の旧市街地と郊外では、取り組み方が違ってくる。それをどこから考えるのかは難しい。郊外を考え直したとき、図書館を考える機会がまた出てきた。1970年代には図書館を含めた都市計画を考える時期もあった。

サラボルサ図書館も、ボローニャにある図書館のひとつでしかない。ボローニャの図書館のなかには、役割を果たしている図書館も、そうでない図書館もある。ボローニャはまちとしてだいぶ大きく発展し（高速鉄道・飛行場・観光）、都市が変化してきた。市民にどうサービスを提供すべきか、まだよく考えられていない部分があるが、一番具合の悪いところから手をつけざるをえない。

トリノの地区の家は、都市のボイドになった場所にまず手をつけた。公共というよりは、下からの力がいろいろな取り組みを起こしつつあり、民間の人達が自力でまちをよくしようとしている。ただ、ボローニャでは、そのような大きい視野のプロジェクトが動いているとは言えない。

**土田：** シビリアンニーズとパブリックイシューは異なる。都市計画はそこをコントロールする機能を持っている。単純な地域エゴイズムとのバランスをどう取るか、ニーズで参加型もいいが、パブリックイシューとしてランクアップさせないと予算が確保できない、という問題もある。

**小篠：** それが、都市圏周辺エリア（ペリフィリエ）を



写真 10-1 チニゼット・バルサモ市立図書館

公式 Facebook : <https://www.facebook.com/ilpertini/>

写真はすべて公式 Facebook より



写真 10-2 チニゼット・バルサモ市立図書館  
公式 Facebook : <https://www.facebook.com/ilpertini/>  
写真はすべて公式 Facebook より

どう人口再構成するかという問題で、ミラノ郊外のまちでは、チニゼット・バルサモという元小学校を図書館に改修してまちの核としていく取り組みもやっている。

土田： ミラノ圏域をどう再編するかという計画はあるはず、交通（トラム）の問題も含めて。

A.A.： チニゼット・バルサモは、田畑だったところが工場になり、南イタリアの移民が入ってきた。だが、産業が衰退してしまい、アイデンティティを作り直す必要があった。そこで、まちのセンターに広場がなかったのだから、核として写真博物館を作った。ジャン・ヌーベル設計の広場は酷いが、図書館がいい感じになっている。

A.A. - Q.： 逆に皆さんに質問したい。伊東豊雄氏設計で「せんだいメディアテーク」と「多摩美術大学図書館」があるが、今でもあいつた図書館を建てる意味があるか？

山田： 文化・社会的に不利な境遇にある人々を含めて市民を広く対象にした社会的な場所として、サラボルサ図書館を含む公共施設を捉えていると理解している。図書館はそのひとつの例で、それらは例えばシアターや地域に開かれた学校・大学・地区の家などでもよく、そうした日常的な居場所、兼社会的包摂の場は、図書館に限ることはもはやないかもしれない。図書館をつくる「必要」（図書館でなければならない理由）はないが、選択肢のひとつだと思う。

小篠： 多摩美術大学図書館（1階の半分は通り抜けの室内広場が挿入）をどういう風に評価するか、を知りたがっている、と思う。

A.A.： ツタヤ図書館にもインタビューに行った。自分は、あれには反対の立場である。ただイタリアでも、元々ある図書館を貸すだけの場所はなくなっていくだろう。

建築の特徴もあるだろうが、スター建築家時代の伊東氏がつくった2つの事例のうち、私は仙台のほうがよいと思う。まちの本当の役割なら、いくらでも人々を入れたほうが望ましいが、図書館は学生対象だから、そのような運用は大学としては受け入れられないだろう。また、居場所となる建物は、そこに住んでいる人に似つかわし

い建物なら望ましいだろう。

**小篠：** 伊東氏も東日本大震災以降に「みんなの家」をつくって、そこから変わった。

**A.A.：** 「みんなの家」は伊東氏と一緒に訪れたが、あれはとても好きだ。その理由は、あの事例が、建築家が自分のデザインをつくったものではなくて、その仮設住宅に住む人がほしいものを形にした、参加型のプロジェクトだからである。伊東氏も、「みんなの家」については自分のデザインの話はせず、人の話をする。宮城野地区では、大きなテーブルがあるが、それは復興のことを皆で考える場所がほしいという希望があったためにつくったそうだ。図書館も、住んでいる人の未来を考える場所になるといい。

**A.A.：** 「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」という NY 市立図書館を描いた映画があって、そのなかでとてもいいなと思ったのは、貧しい人々に1年間モデルを無料で貸し出す活動である。そうすると、貧しい人々は今までたどり着けなかった情報を得られる。とても民主的な取り組みであり、図書館はそういった働きをもつべきである。そこには、職業安定所のような場所もあって、そこではどうやって仕事を探すか・仕事に向き合うかを教えてくれる。また、ネクタイとジャケットを貸してくれる（キチンとした格好で仕事にいったほうがよいだろう）。

**Q.：** またここで質問をしたい。本ではなく、物や道具を貸してくれる図書館がある。そこでは、減多に使わないけど、必要な時にないと困るものを貸してくれる。年に1度くらいで買うほどのこともないもので、みなさんなら、どんなものが貸してもらえるといいか？

- ・おもちゃ。こどもが何が気に入るかわからないので。
- ・雪かきスコップ（使う日はみな同じなのが問題だね）

**A.A.：** 一番の人気は、ドリル（工具）だそうです。

- ・なるほど、海外に赴任したとき最初に、イケアの家具を組み立てるのにドライバーが必要だった。



**写真 11** 映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』

公式サイト：<http://moviola.jp/nypl/>

チラシは同映画の公式 Facebook より

([https://www.facebook.com/pg/wisemanjp/photos/?ref=page\\_internal](https://www.facebook.com/pg/wisemanjp/photos/?ref=page_internal))

・家のメンテのための脚立も役に立つ。

**A.A. :** 私には94才の母がいて、私がいれば手助けが必要なときにはサポートができるので、母はタブレットで新聞も読めるが、もし1人だったらそういったインターネットや情報のある環境から完全に切り離されてしまうだろう。お年寄りにはインターネットカフェには行かないだろうが、図書館にインターネットができる場所があって、助けてくれる人がいれば、タブレットを使うこともあるだろう。

日本でも、1日中、居心地が良く、1円も消費しないで居られる場所って、ほとんどないでしょう。そういう場所を考えてほしい。そういう場所を作りたい。

貴重なお話を、ありがとうございました。



## 【キーワード】

〔施設種別〕高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅（住宅型ホテル） ■地区の家，他  
 〔運営主体〕市区町村 法人 NPO 個人 ■社会的協同組合  
 〔建物形式〕■1棟単体型（分散） 複数棟集合型 団地型 集落  
 〔建物状況〕新築 増築 ■改修 一部改修 既存  
 〔対象者〕高齢者 障がい者 子ども ファミリー ■多世代 ■移民

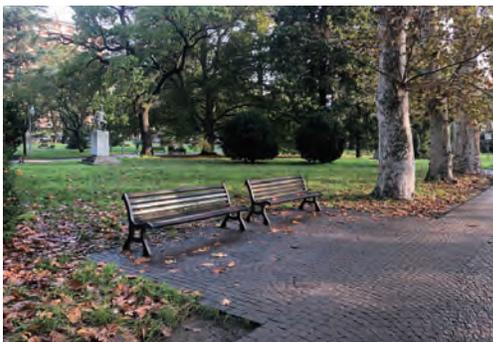


写真1 アレッサンドリア庭園 Giardini Pubblici

ピエモンテ州南部の都市，アレッサンドリアでは，社会的協同組合などの地域のNPO団体が連携してまちの活性化や社会的弱者を含む社会的包摂がなされたコミュニティづくりに取り組んでいる。多様な事業の組み合わせによって住民たち自身の手で地域経済を回す仕組みは，今後の地域づくりにおける，小さいが力強い基盤となっていく。

視察月日 11月5日

記録担当者 佐藤栄治，土田寛

案内者 ファビオ・スカルトウリッティ氏（社会的協同組合 Associazione Comunità San Benedetto al Porto，アレッサンドリア支部の代表）  
 フェデリコ氏（組合スタッフ）  
 多木陽介氏（通訳）



図1 アレッサンドリア (Googlemap)

## 1. アレッサンドリア Alessandria の概要と行程

### 1) アレッサンドリアの概要

アレッサンドリアは，ピエモンテ州南部の都市で，アレッサンドリア県のほぼ中央に位置する県都であり，周辺地域を含み人口約9万4,000人のコムーネである。周辺には，17の分離集落を有する。

街の北から西にかけてタナロ川が流れ，かつてはそれに平行した一辺を含む，東西に長い六角形の城壁に囲まれた城塞都市であった。現在はその城壁は撤去され，跡

写真1 ファビオ氏（代表）とフェデリコ氏  
スタートのホテルから視察を開始する。

が道路になって市街地をぐるりと囲んでいる。城塞跡道路の南東にアレサンドリア駅があり、駅前の公園が市街地内で最も大きい緑地である。市街地には北西側（川の方）にかけて内部にゆるやかな起伏があり、街路に変化を与えている。

## 2) 行程と地図

地区の家と関連施設群を運営する社会的協同組合の代表であるファビオ氏と、スタッフのフェデリコ氏に案内いただき、拠点としたホテル(ホテル・アレサンドリア)を出発地点として、旧市街地の、①中心広場（自由広場、現在は駐車場として利用されている）、から、②開発（店舗の入れ替わり）が進む通り、③古い商店、④開発が進む広場、⑤帽子ブランドのボルサリーノ本店、⑥自主的整備エリア、⑦地元衣料品店、⑧フェアトレードの店、⑨移民エリア、⑩ソーシャル・プロモーション・アソシエーション（移民支援のための拠点事務所）、⑪地区の家（移民がスタッフとして働くカフェ）、⑫市民菜

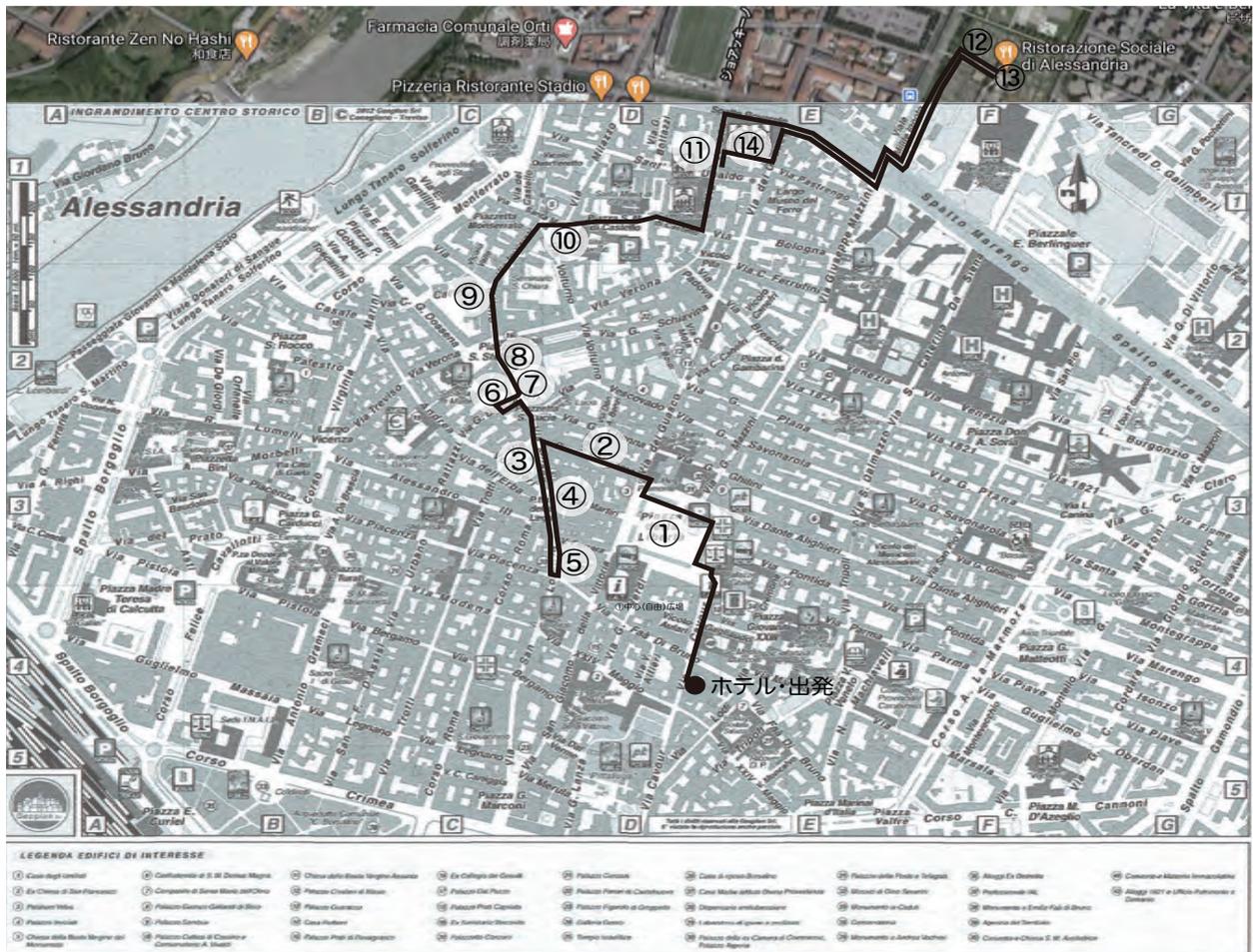


図2 アレサンドリア視察の移動行程

園, ⑬ソーシャルレストラン, ⑭空き家再生の Second Hands, ⑫地区の家, と移動した。地区の家の報告は次章, 移動行程は図2に示す。

## 2. 各視察先の概要とインタビューの記録

### ①中心広場（自由広場 Piazza della Liberta）

街の制度的な中心地である自由広場（写真2）は、新聞社、イタリア国内でも有名なホール（コンサバトーレ）、イタリア銀行の本店、アレッサンドリア銀行など、アレッサンドリアの街と周辺地域の市政を整え統括する県庁的な役割を担う建物、郵便局（写真3）等、アレッサンドリアと周辺地域の生活を整えるための公的権力の中心であり、行政の中でも最も実際的な役割を担う組織の建物が広場に集まっている。今では駐車場になっているが、広場には昔大聖堂があった。ナポレオンがここに泊まったときに大聖堂があるために何も見えないと言い、壊させたと言われているが、その逸話が本当かどうかはわからない。10年前に駐車場を地下化することを試みたが、大聖堂の基礎が出て来てしまった。イタリアでは考古学的な遺跡が出てくるとそこには何も作れないため、それ以降、工事がストップしており、今に至る。

郵便局は、1920年前後までファシズムの時代で文化芸術の影響があった典型的な建物である。あらゆるコミュニケーションを表現した、38.5m×1mのモザイク画が施されている。

### ②開発が進む通り（ミリャーラ通り Via Migliara）

旧市街地は大きく分けて2つに分かれている。駅からホテル、広場北東までの商業的な活気があるエリアと、その西側の工房等が多い職人のエリアである。この場所（写真4）はその境目に位置するゾーンを貫く通りである。

20世期になってからお金のあるファミリーが街の中の建物や街区を購入し所有するようになると、行政の開発



写真2 自由広場

街の中心的広場。大聖堂のあった場所は現在駐車場。



写真3 郵便局

ファシズム時代の象徴的建物。



写真4 開発が進む通り

オレンジ色の建物は民間の開発



写真5 (上) 古い商店

写真6 (下) 古い商店の店主と話す

以外で、プライベートのファミリーが所有する部分が個別に開発（建物の改修と新規事業の割り付け）する事例が増えた。このように、街全体の商業や業務ゾーニングの構成に対して、民間が使い道を左右する形で介入してきている。

### ③古い商店

生活関連用品の雑貨屋として50年以上営業を続けてきたが来月にお店を閉める。近年の生活スタイルに対応した品揃えを確保できず、近隣のスーパーと競合した結果、経営継続が困難になったという。靴の手入れのための様々な用品や、洗濯用洗剤等の日常生活雑貨を扱っており、かつては街でここを使わない人がいない、生活に根ざしたお店だった。

### ④開発が進む広場 (Piazzetta Della Lega)

商業エリアの中心に位置する、三角形の小広場。中央には石造りのオベリスクが建っている。自由広場は権力の中心だが、ここは市民の生活の中心になる広場である。この20年でだいぶん街の雰囲気が変わった。かつては街の通りはすべてピンコロ石張りであったが、ここ10年ほどで舗装の敷き直しが進んでおり、今はこのレガ広場も含めて、より歩きやすいインターロッキング舗装に置き替わっていつている(写真7, 8)。この新しい舗装は、街の人はあまり好ましく思っておらず、戻してほしいという声を聞いている。



写真7 開発が進む広場



写真8 新旧の石畳

広場に面する劇場だった建物(写真9)は何年も空き家のままであったが、現在部分的にカフェとして使われるようになった。もともと街にあった昔ながらのお店、特徴のある個人商店は無くなっていき、世界的にも有名なブランドやチェーン店などどこでも同じような店が入り始めている。この広場の近くには靴作りで有名な工房もあったが、今はもうなくなっている。



写真9 元劇場のカフェ

黄色い建物が元劇場で、現在はカフェ

### ⑤帽子ブランドのボルサリーノ本店

イタリアのファッションを代表するブランドの一つであり、世界的にも有名な帽子ブランドのボルサリーノは

アレサンドリアを発祥の地としている。ジャン＝ポール・ベルモンドの映画で世界的に有名になったが、本店は創業以来変わらずにレガ広場近くで営業している。

この店では、お客さんとの個人的な関係を大事にしている。現代的な商業施設であるショッピングセンターでは、ものの価値は品物と値段だけで決まるが、昔ながらの旧市街地では売る人と買う人の関係が大事にされており、購入価格が少し高くても人々はその関係性も含めて街場の商店街の商店で購入する。ボルサリーナの場合は世界的に有名になったが、他の店でも同じで、季節ごとのメンテナンスに訪れてもらう、お客さんが親から受け継いだ帽子の型を店でもずっと保管してあるなどの顧客との継続的な付き合いを大事にしている。こうした関係性は自分たちの仕事のしかたとしても大切なことで、遠い場所にいる人に売るのではなく、近くの人との関係の中で働いて売り買いをする。経済的なやりとりが、人間的なつきあいと共にあることが大切である。



写真 10 ボルサリーノ本店の外観



写真 11 ボルサリーノ本店の店内

## ⑥ 自主的整備エリアとお菓子の店

ミラノ通り Via Milano に直行する細い路地、ジュゼッペ・ピッサッティ通り Via G. Bissati。この通りの店の人たちは街の美しさを保つために自分たちでアクティブに活動している。昔ながらのピンコロ石張りの通りを整え、一定のルールの下で各店舗の前に植栽の鉢をならべ、揃いのフラッグを通りに共通して掲げている。通りも植栽にも手入れが行き届いており、街の景観を積極的に整えている様子をうかがうことができる。通りの入り口にある自家製造菓子の店 Cioccolato Di Ghibaudi Laura を尋ねたが、ここはとても評判が良く、繁盛している。

このエリアは職人街だが、近隣の職人の店は物が売れなくなって廃業するケースが少ない。しかし、商品の質が非常に良い店や、近隣商店で協力して商売を盛り立てているところは、常連のお客さんもついて活発に営業を続けている。



写真 12 自主的整備エリア

## ⑦ 地元衣料品店

ミラノ通り Via Milano 沿いにある、個人経営の衣料品店 Corner Casual&Terraces。この店は、地元で買い物をすることがまちを守ることだというメッセージを店



写真 13 菓子の製造・販売のお店



写真 14 地元衣料品店の中



写真 15 地元衣料品店の外観



写真 16 (右) フェアトレードの店

頭に掲げ、ものの売り買いとまちづくりの融合を経営理念としている。この店ではアレサンドリアまで徒歩か自転車で来た人には特別な割引をしており、近距離での商圈とエコへの意識を大事にしている。店主は、商売には商品のクオリティも大切だが、さらに街のアイデンティティにいかにか寄与することも大切だと考えている。そのため、どの場所でも同じように商売をするのではなく、この街で、この店に買いに来る人との人間的な関係を大事にしている。

一般の商業的な評価ではないかもしれないが、例えばこの店に来てマフラーを買い、ありがとうとだけ言って出て行くこともできるが、ついでにサッカーなどにかの話題を通して店主といろいろな話をしてマフラー以上のものを得て出て行く、といった関係性を大事にしている。サポート・コア・タウン・ストア（地域の互助の拠点となるまちの商店）は、自分たち自身のモードと、まちの維持のためにも重要である。

顧客との関係を大事にしていることの別の例として、クリスマスになると顧客にマイボトルを自分のロゴを入れてプレゼントする、という例も挙げられる。エコのため、イタリアではプラスチックを使わないようにしているので、マイボトルは重宝してもらえし、店からのメッセージを顧客に発信していくことにもなる。

## ⑧フェアトレードのお店

イタリアや、ヨーロッパの北部に多いスタイルで、一つ一つの商品に対して、正規の金額が生産者に渡るように、流通、販売を行う仕組みのお店。生産者の尊厳を守り、生産者が新興国での生活レベルを守れる値段設定を行う。EQUO GARANTITO 傘下の alteomercato がフェアトレードの運営を支援している。先に援助の資金を渡すことに特徴がある。また、関係を始めた場合には長く続けることをモットーにしている。ビジネスとして商品価値が高くなるよう、イタリアの人の好みに合うようにデザインを助ける等の介入も行っている。

例えばコーヒー豆はペルーの小さな生産者の 3000 軒とコラボレーションして生産～販売までを行っている。生産者に対して、有機栽培であることなど品物の品質や生産過程での倫理を守るためのルールを遵守を求めるこ

とから、生産者の側にも一定の覚悟と見識が必要である。イタリア国内からは、マフィアから没収した土地で作られた農産品を販売したり、刑務所で作られたものを販売している。

エコロジカルな取り組みでもあり、生産者や街の人とのつながりを大事にしている。ただ、市場の価格よりも高く買うことは簡単なことではなく、このチェーン店を現場で運営しているスタッフは無償～廉価のボランティアに頼らざるを得ないなどの人件費上のコストカットの必要がある。

## ⑨移民エリア

急激な移民増に伴って、多くの移民が住んでいるエリア。もともと職人の工房と居住のエリアであったが、不景気で工房が廃業する等の影響によって空き家が増えていることから、このエリアに新住民として移民の流入が続いている状況である。アレッサンドリアへの移民としては、地理的条件によってアフリカからの移民が多い。

移民の流入に付随して、治安の悪化や生活環境の悪化（さほど広さに余裕のない物件に、きちんとした回収もなく複数人が居住するなど）がこのエリアの問題となっている。このため、現在の劣悪な建物の改修や生活環境を、地元住民とともに協力しつつ、5-10年の中期的プランで改善する取り組みを始めた。



写真 17 移民エリア

## ⑩社会振興協会 Cambalache

国連難民組織 UNHCR から支援を受けて、移民の様々な支援をしている社会振興協会（Associazione di Promozione Sociale）である、Cambalache（カンバラーチェ）<sup>1)</sup>のオフィス兼店舗（養蜂事業の製品等を販売している）、集会機能をもつ拠点である。この組織は、スタッフ5名、ボランティア5名で運営されている。なお、アソシエーションは事業コンペに勝って、プロジェクトごとにお金をもらう仕組みであり、ずっと続いている資金源を持っていない。現在この団体は、主にアフリカからの移民の対応を行い、滞在許可証発行のためのサポートや就労・居住の支援など、種々の職能をもつスタッフや連携会社がある。Cambalache は、難民や亡命者の支援運動である LOACCOLGO <sup>2)</sup>に参加している。

### 参考文献

- 1) UNHCR Italia, Cambalache – Bee My Job, <<https://www.unhcr.org/it/cosa-facciamo/partner-progetti/cambalache/>>, 参照 2020.09.23
- 2) #LOACCOLGO, <<http://ioaccolgo.it/>>, 参照 2020.09.23, 「私は歓迎します」キャンペーン。そのトップページには、「Partecipa a #IoAccolgo per dire no all'odio e all'esclusione e sì all'accoglienza, alla solidarietà e all'uguaglianza. #IoAccolgoに参加して、憎しみと排除に反対し、歓迎、連帯、平等に同意します。」というメッセージが掲げられている。このキャンペーンの目的は、市民社会組織、機関、労働組合の幅広い前線の主導により、亡命希望者およびイタリア政府が進める制限的な政策に強力かつ統一された対応をすることである。



写真 18 Cambalache のオフィス前



写真 19 Bee My Job の視聴後の質疑

Cambalache は、移民に仕事を教えることと、労働のチャンスのあるところに紹介することを主な目的としている。例えば農業に従事する人のかなりの割合が移民になっており、移民がいないと成り立たない。中には、搾取の事例もある。この移民の労働環境はイタリアでは社会問題になっていて、移民が奴隷のような低賃金で働かされていて、移民労働者の暴動が起きたこともある。

## ■ 「Bee My Job」プロジェクトについて

2015年から始まった、都市型の養蜂を移民支援として行う事業であり、「社会的養蜂」と称している。移民がBeeKeeper（養蜂家）と慣れるように技術を学ぶ支援をしており、これはみんなで巣をつくり、蜜を集めて集団を守るという蜂の習性が、共生をコンセプトに掲げる団体の事業としてふさわしいと考えたためである。養蜂の仕事が教えることが第一段階で、次に就労のチャンスがあるところに紹介することが第二の段階である。移民が養蜂を学んで、どこかに務めることができる段階になったら、仕事と住まいの面倒も見る。

### Q. 何人くらいが職についた？

プロジェクトが始まってから、今まで事業全体で170人くらいがBeeKeeperとして仕事をできるようになった。アレッサンドリアだけでなくロザルノ（カラブリア州レッチョ・カラブリア県）、エミリア・ローマニャ州とイタリア国内の何箇所かでこの事業をしている。来年はフィレンツェとローマでも始める。

### Q. 人手のニーズはあるのか？

養蜂場の人手はまだまだ求められている。ただ、世界的な傾向として、蜂が死んでしまうという被害が出ており、市場のニーズに対して生産量が不足している。蜂が死んでしまう原因は、農薬や気候変動等で、蜂の生存環境が悪くなっていることにあると考えられている。

### Q. どのくらいの期間、就労支援を受けるのか？

ここでの訓練は1ヶ月。そのあと農家や会社に入って、約1年で一人前になる。言葉の問題や人間関係などが課題となって、上手く就労に結びつかない場合もある。自分たちが提供するのは就労経験であり、機会はつくるが、そのすべてが契約に結び着くというわけではない。別の農家に行って探す、別のセクターに再チャレンジする人もいる。

## Q. 他の仕事も選択できるのか？

工場に移民を紹介するプロジェクトもある。連携する社会的共同組合としては、移民だけが相手ではなく、若者や障害のある人の就労支援をしている。その就労支援の一環が移民であり、その場合にはイタリア語習得や労働安全の保障、免許取得の支援などが特徴となる。滞在許可申請のフォローが必要なこともあり、必要ある場合は警察までついて行く。難民で滞在許可証がない人が、難民申請をリクエストしても通らないことがあり、滞在許可証がまず必要になる。

## Q. アソシエーションの運営は？

この組織も NPO ではある。アソシエーション<sup>3)</sup>には収益の基準（どれくらいの収益を上げて良いか）もある。株式会社ではないので会員には収益から配当をすることはできないが、従業員は給与を得て良い。また、この養蜂の事業では利益が出るが、その利益をプールすること（内部留保）はできないため、アソシエーションの目的にそぐう別のプロジェクトに投資するなどの処理が必要である。人手としては、ボランティアに対して国の支援があり、4人はそうした方面からのスタッフである。心理学者の支援等が含まれる。アソシエーションの活動のためには予算が必要であるが、こうした事業に対しては組織でないと応募できないことになっている。事業は全て有期のコンペ方式で募集があり、毎年応募している。Bee my job は、成果が上がっているのので、継続的に就労支援事業費の対象になっている。

## Q. 移民は長くイタリアに滞在するか？

イタリアまで難民として来て、労働で滞在許可書を取るのとは相当大変であるが、だからといって帰りたい人はそんなにいない。イタリアに定住できてからの帰国者の例では、例えば紹介ビデオに登場したセネガル人は今では1年のうち1ヶ月は定期的にセネガルに帰って、故郷の人たちの生業となるよう、養蜂家を育てている。

## Q. Bee my job の支援対象者はどれくらいの頻度で来るか？

この1年ではここアレッサンドリア17人（トリノ、ミラノに住んでいる人を含む）、レージョ・カラブリア（カラブリア州）10数人。ビーマイジョブ以外も含めると年間で300人くらい。これらの人たちがこの団体にとっての継続的な支援対象者となるとは限らず、滞在許可申請

3) イタリアの非営利活動団体の枠組みとして、アソシエーション Associazione があり、設立が容易で活発に活動が展開されている。主に2種類が広く知られ、該当数が多い。

### ■社会振興協会 Associazione di promozione sociale (APS)

会員や第三者への社会的利益をもたらす活動を目的として結成された、認知された団体（国・地方 regionale・州 provinciale に、目的・メンバー・内容等を登録し、決算報告義務を持つ）、また認知されていない運動、その他の社会的な集合体である。「ボランティアに関する基本法（1991年8月11日法律266号）」により、単純な任意団体は会員に報酬を与えられないが、社会推進協会は、特別な必要性がある場合には、会員に報酬を与えることができる（2000年12月7日法律第18条第2項、第19条第383号）。

### ■参加組合 Associazione in partecipazione

イタリア民法に規定される典型的な契約で（雇用契約とは異なる）、営利企業の労働力や資本の拠出を伴う株主形態を意味する。拠出金は資本性のものであってもよいが、労働者の拠出金、または資本と労働の混合拠出金で構成されている場合もある。会員は、提供した拠出金の対価として、契約満了時に、拠出した資本金に加え、合意された割合で利益を得る権利を有するが、損失は拠出額を上限とする。

（序章より抜粋）



写真 20 市民菜園の入り口



写真 21 市民菜園の様子



写真 22 市民菜園からレストランへ



写真 23 建設中の温室

の補助や、警察への付き添いまでで支援が終了(別の支援の枠組みに引き継ぎ)することもある。

## ⑪市民菜園・ソーシャルレストラン

旧市街地を囲む環状道路を出たところに位置する。ここはかつて保健所の土地であり、精神病患者の療養施設とそこで園芸療法を行うための畑として使われていた場所である。現在、この敷地の中ではいくつかのプロジェクトが行われている。

### ■ 市民農園

敷地内で行われているいくつかのプロジェクトのうちの一つが1990年から市が始めた市民菜園で、運営はアソシエーションに委託されている。以前の精神病患者の療養施設と農園は組織的な運営が悪く、保健所から市が引き取って、市が市民向けの農場にしようと計画した。ここは、旧市街から数分で来られるという立地で、春から夏の暖かい時は市民が喜んで利用する場所になっている。一人でもファミリーとでも、歩いても自転車でも来られ、日向ぼっこをして芝生の上で寝ることも安全な場所である。

畑は178の区画に分けて貸し出しされており、65歳以上の市民が対象で、当選すると無料で使用できる。ウェイティングリストには30人くらいの待機者がいる。6ヶ月放置禁止、野菜を育てること、所得は中低所得、田畑を持ってない都市部に住んでいる人、リクエストした順番に抽選、等のルールがある。しっかり手入れをして農作物を育てる人でないと貸与の契約は取り消される。

資金繰りを含む事業の運営はアソシエーションに任されているが、市も何もしないわけではなくてレストランと農園のために井戸を掘った。これは、要望を受けて実施したものである。井戸を掘るのに必要な費用は6000ユーロほどで、この費用を市が払う理由は、井戸がなかった時は散水のために水道の水を使用していたが、井戸があればその消費がなくなるという経済的合理性による。178区画の畑があつて、畑の使用者は好きな時に好きなだけ水を汲み込んで使用するためそれなりの量となる、と試算し、井戸があることのメリットを説明して市の側を説得して理解してもらうのは大変だった。試算によれば、井戸を掘って水道水を使わなくなったら、1年間で十分

に元が取れる。経済的合理性に加えて、井戸水の利用には社会的、倫理的な意味もある。この地域では夏は水不足になるので、水道水を使わなくて済むことは市の水道への負担を軽減する効果がある。また、こうした形でパブリックな機能を一般市民が管理することで、公共にどんなことが必要かを市民も学ぶことができる。このようなロジックで市が費用を投じて井戸を掘ることになったのだが、ことほどさように 事業運営や事業費の引き出しに際しては説明と説得が必要である。

## ■ ソーシャルレストラン (Ristorazione Sociale di Alessandria) <sup>4) ~7)</sup>

精神病患者の支援施設として使われていた建物が改修されてレストランとして使用されており、その経営はファビオ氏の運営しているアソシエーションに委託されている。初期の建物の状態は悪かったが、市から無償で使用許可を取り、自己資金で改修・利用している。このレストランも、人的ネットワークを作り、プロジェクトによる補助金を獲得し、今までなかった新しい形で社会的弱者を救う仕組みで運営されている。現在でも、レストランや市民農園の運営にあたって、社会的に弱い立場の移民、囚人、麻薬中毒者が就労している。

レストラン開設の経緯としては、市民農園の開設あたり、ピエモンテ州から15万ユーロの補助金を受け、安全のために監視カメラをつけようとしたがカメラをつけるにはお金が足りない。そこで農園内の建物をレストランに改修して人が来れば、カメラを設置せずとも安全性が担保できると提案し、その提案が採択された。5年間をまず運営することとなった、という裏事情もある。現在が5年間を迎えて次の段階に入っていくフェーズである。

事業継続が叶うかどうかについては、自分たちがどれだけ社会的に有効な仕事をしているか、それを行政などに認めてもらうことが重要である。とりあえずの5年は、利益はもとより市からの補助も0でいい。そのあとどうするかは、その時にこれだけお金もかけて作った、有用な仕組みを無くすのかと行政と交渉ができる。そうした点からも、本当にパブリックな場所（市民に必要とされる公共性をもつ場所）にするということがどういうことをよく考えることが必要である。いま、この市民農園とソーシャルレストランは、行政が運営母体ではないが、

4) PIEMONTE CHE CAMBIA (変化するピエモンテ), Ristorazione Sociale Alessandria, <<http://piemonte.checambia.org/pagina/ristorazione-sociale-alessandria/>>, 参照 2020.09.24

5) Cooperativa Sociale - Alessandria, <<http://www.coompany.it/>>, 参照 2020.09.24

6) COOMPANY &, <<https://www.diocesi.torino.it/turismo/wp-content/uploads/sites/16/2017/05/Presentazione-Cooperativa-Coompany-flyer.pdf>>, 参照 2020.09.24

7) 社会協同組合「COOMPANY &」は、1993年6月にアレッシェンドリアで誕生し、連帯solidarietàと市場mercatoを組み合わせる実践的な試みを行おうとしている。タイプBの社会的協同組合の認定を受けており社会的、経済的、政治的、文化的、宗教(教会)的環境の中で、地域territorioとその基本的なニーズの分析をもとに、社会的弱者である人々のニーズに対応したサポートを取りかかりとして、数多くのプロジェクトに取り組んでいる。



写真 23 レストランから菜園方向

誰もが入ってきて過ごせる場所であり、市民にとっては公園としてパニーニョを持ってきて食べられる場所となっている。また、レストランは今は毎日100人以上の市民がランチにくる場所になっている。これがパブリックな場だろう、と自信をもっている。

#### ■ 事業の発展

市民菜園を運営しているアソシエーションが、敷地内にあるもう一つの空き家を再生するプロジェクトを進行中である。上階はB&Bを設定し、宿泊者や一般の人が来て、自分たちでパンやピザを焼けるように、下階にはかまどを作る予定である。民間企業（アソシエーションを含む組織）が、利用密度が低かった敷地に入って来て、ソーシャルな事業を起こし、入ってきたお金で社会的に困窮している人々の就業事業を回す。このように、現状は空き家にしてはいるよりも有効な使い方になっている。

春には、もともと温室があったところに新しい機能の建物をオープンできるように建設中である。市民農園を経営しているアソシエーションは収入を得ているため、自己資金で温室の再生に着手した。設計したのはアレクサンドリアの建築にかかわる市民である。市の土地に新しくできるが、市の負担は一切ない。何もなかったところに新たに建物を建てるのではなく、もともと存在したものを再生する仕組みであるといえる。

温室なのだが、ここは植物のための場所というよりも、多様な活動に使えるように想定しており、ソーシャルな性格をもった、アソシエーションの場所にしたいと考えている。この建物を新築するために、12万ユーロの補助金を集めた。例えば結婚式を挙げるといった使い方ができれば良いと思って、いろいろな使い方を考えている。

#### ■ アソシエーション同士の協同（周辺のアソシエーションのネットワークをつくっている、ファビオ氏のインタビュー）

2000年頃までは、アレクサンドリアのアソシエーション同士は資金的な競合状況であったが、それ以降は社会情勢が悪化し、競合より協働するようになり、そしてお互いにコラボレーションすることで利益を生むようになった。これからのフェーズとしては、街の職人や商人等、多様な街の人々を巻き込むプロジェクトを推進したい。相互の話し合いを進めるうちに、多様なステークホルダーのネットワークが形成され、コラボレーションを



写真 24 右手奥にあるのが、今後改修する建物

する意思があることが見えてきた。

この市民農園には以前にもアソシエーションがあったが、上手く機能しておらず、きちんと管理運営されていなかった。そのときには、利用者間で喧嘩になることもあったが、今はなくなった。運営がきちんと入って、ルールができて、コミュニティができた。4/5の畑は、使えていなかったが、運営の整備によって、きちんと手入れをしなければならなくなった。もともと畑を使っていた人たちからは文句もあったが、今ではコーディネートされた場所になったと、理解されている。私たちは活動のなかでよくありがたうと言われるが、いろいろな立場の人たちがいて、協同することで、うまくいっている。

まちには、住民や生活・支援のニーズなど、いろいろな変化がある。やってくるものをどうやって受け入れて、どうやって良い方向に持って行くかの準備をしておかないといけない。自分たちの街も1000年も前から変化し続けているわけで、変化することは自然なこと。ただし、変化に対しては、人間は抵抗することがある。変化に対しては絶対になんらかの抵抗がある、ということは心得ておかないといけない。変化への抵抗があるということをも前提にして、それでも「その時」に、変化と変化への抵抗とを受け入れてどんな変化につなげていくか、関係者が一緒に考えていく。

この敷地で、ソーシャルレストランのプロジェクトをやろうとCOOMPANY & が考えたとき、市民農園の方はうまく機能していなかった。その運営をしていたアソシエーションを追い出すこともできたが、そうではなくて相互に連携することでアソシエーションのネットワークに取り込んだ。本当の変化は、この建物がソーシャルレストランになったということではなく、農園を管理するアソシエーションの人たちが仲間となって事業を展開できるようになったこと。他から解決されるよりも、自分自身が変わることで問題が解決できるようになる方が嬉しいもので、活動がより活発になっていく。

## ⑫ 空き家再生の工房付き Second Hands (リサイクルショップ)

店名はSecond LIFE。不用品を回収し、それらを安価で販売する店舗である。最も安い品物は1ユーロ。も



写真 26 セカンドハンズの外観



写真 27 セカンドハンズの内観

内装にはお金をかけていないが、印象的なラインがデザインされ、しゃれたイメージである。



写真 28 工房の中

移民の女性たちが洋服の修理のワークショップに参加していた。

とも木工所の事業所であったが、空き家になり、そのまま放置することが治安の悪化にも繋がると懸念して、COOMPANY & の新しい事業として開店した。新規の物件は負担にもなるが、家賃を安くしてくれたこともあり事業をスタートすることができた。改修にあたり、外観や内装を見違えさせるような完璧な改修をするのではなく、元の記憶・形状が残る形で改修することで、この地域での馴染みの感じを出そうとした。そこで、経費の3万ユーロを補助金等で集めて、電気と水回りと窓だけ直してもらい、あとは自分たちとボランティアでペンキを塗ったりして仕上げた。

市民の人たちが、洋服、バック、靴など、使わなくなった品物を寄付してくれ、受入が1日に何百キロになることもある。奥に工房があり、そこで使えるものを選んで、洗ったり修理して商品にする作業をしている。この作業も、就労支援事業の一環になっている。ほかに、縫い物教室などを行っている。

寄付された品物を貧しい人に「あげる」こともできるのだが、施しものではなく、安くても自分のお金で「買う」ことが大切であり、それは人間の尊厳に関わるからである。そのため、低賃金でも買えるように価格をごく安く抑えている。縫い物教室を開いて技術を身につけることで、家族の服を自分たちで繕って使うことができるようになり、またこのようなりサイクルショップ等での就労につながる可能性もある。